

2019年度 ドコモ市民活動団体助成事業 活動成果報告書

2020/9/3

団体名	NPO法人 Paka Paka	活動タイトル	発達支援に関わるステップアップ講座		
望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）			■ 活動風景		
● 地域の望ましい社会状況(ビジョン)	発達障がい児に必要な発達支援とは、簡潔に述べると周りの環境を整え、子どもとその環境との相互関係によっていい学びを促進すると言われている。言わば、子どもの周りの環境（保護者、支援者、地域住民）がどのように適切に関われるかが重要だと思われる。そこで、発達障がい児に関わる保護者、支援者、地域住民に簡単な学びのきっかけを提供し、より深く育成する・支援する側になる仕組みを作ることにより、どの環境（家庭、保育園、学校等）においても適切な対応が為されることが当団体の望ましい社会の在り方だと考える。		「発達支援サポート講座」 勤務後に支援者が集まり研修を行った。		
● 団体の社会的役割(ミッション)	当団体は発達障がい児に効果が有効だと言われている応用行動分析学（心理学の一種）を専門として個別・小集団での支援を行っている。当団体が日頃支援することにより蓄積している知識や技術を行政等の協力を得ながら地域や関係機関・保護者に提供することが社会的な役割だと考える。				
● 団体の活動基盤	<ul style="list-style-type: none"> ● 人材の確保と育成：講座の開講では、関係機関との連携が必要になってくると思われるので、行政、各支援事業所、相談支援センターに情報を提供しつつ実施する。また将来的な講師ができる人材を関係機関を通して声をかける。 ● 物的資源：助成事業から必要設備を購入。 ● 活動資金：各講座の参加費及び将来的に行政側から活動資金を負担してもらうために実績と効果測定の実績をまとめる。 ● ナレッジ：今までの先行研究、論文から講義用資料を作成、効果測定から修正し、資料の精度上げていく。 				
■ 活動報告			■ 1年間の目標に対する達成状況		
<p>今回の助成事業で行った発達支援に関わるステップアップ講座と題して、地域住民、保護者、支援者を対象に様々な研修を行ってきた。一部、地域住民や保護者の参加は多くはなかったがその反面、支援者を対象にした『発達支援サポート講座』や『発達支援保育士研修』は一定の参加や効果が達成できた。</p> <p>特に今回の活動の成果として、今迄当法人のみで動くことが多かったが、他機関と協働して特に公的機関である行政・自立支援協議会と市町村の人材育成の課題として取り上げてもらえてことは意義があったと思われる。</p> <p>その一方で、本来コロナの影響で後半の計画ができなくなった部分はあるものの、コロナの影響でなければ行わなかったICTの活用の利点が理解できた。行政・自立支援協議会等関係機関との関係性を構築しながら来期はICTをいかに学びに繋げるかを進めていきたい。</p>			<ul style="list-style-type: none"> ● 地域住民：町の広報等に記載してもらったが、支援者や保護者が多く一般の地域住民が参加することはなかった。 ● 保護者：就労や子どもの託児の問題で参加者は少なかった。その反面、コロナの影響で自宅にいざるを得ない状況下においては、保護者や児童も一定の評価をもらった。 ● 支援者：「発達支援サポート講座」「発達支援保育士研修」共に参加者から一定の評価を得ることができた。こちらが予測した効果測定でも一定の効果が見られた。 ● 関係機関：「発達支援サポート講座」「発達支援保育士研修」共に行政・自立支援協議会の評価を得、町の研修の仕組みに組み込むことが出来た。行政が努力義務とされている専門的な人材育成に大きく貢献できたことにより、来期も担当させてもらうことが可能となった。 		
■ 事業を通じて得られたノウハウ			■ 望ましい社会状況を達成するための課題		
<ul style="list-style-type: none"> ● 関係機関とのネットワーク：行政のみならず自立支援協議会・地域の相談支援センター・児童発達支援センターと繋げることができた。また研修の在り方について企画段階から議論できるネットワークを構築でき、今後の地域の人材育成の課題としても取り上げられる機会が作れた。 ● ICTを活用した学びのスタイル：本来は予定していなかったがコロナの影響でICTを活用せざるを得なくなり、先事例を元に基礎的なICTを活用する研修スタイルを構築できた。 ● 研修の仕組み：今まで多数の参加者を対象に効果測定を取り検証する機会がなかったが、効果測定を取ることで効果的な研修の仕組みを行うには個より組織へのアプローチが重要ということを見出すことが可能になった。 			<ul style="list-style-type: none"> ● 地域住民：研修というスタイルでは地域住民は参加しにくい部分がある。発達障がいはまだ一般化されていない部分があり「来てもらう」というスタイルでは啓発にはなりにくい。こちらから「発信する」スタイルが重要だと考える。 ● 保護者：保護者の就労形態・核家族化・子育てに関する環境からこちらを上記同様に「来てもらう」では届きにくい部分がある。保護者特に母親にいつでもどこでも簡単に「伝わる」仕組みも重要だと考える。 ● 支援者：研修を学ぶことが出来ても、組織のリーダー格が変わらない限り効果的な支援方法は子どもには伝わりにくい、そのため組織のリーダーに支援方法を学んでもらい、組織のスタッフに共有する先事例の研修するスタイルを参考にして来期に行う。 ● 関係機関：関係機関でも温度差の差は否めない部分がある。消極的な機関にアプローチするより積極的な機関にアプローチし地域全体で学ぶことは重要という考えを広めていくことが重要だと思われる。 		
■ 活動成果のアピールポイント（自由記入）			この1年間の活動を通じて	関係機関と協働してICTを活用した研修体制の仕組み作り	を達成しました。
■ 受益者の具体的な変化（効果測定結果等）					
<p>支援者：支援方法で意識的に考え、他の職員と共有することが可能になった。</p> <p>関係機関：公的な会議での議論ができ、地域の専門的な人材育成に関してビジョンを構築することができた。</p>					